

041206 M1 藤森 照信先生インタビュー at 東大生産研キャンパス藤森研究室

インタビュアー:中村 政人 アシスタント:福田 啓作

中村 (以下、N) : まずは M1 に住むようになったきっかけからお伺いできればと思います。

藤森 (以下、F) : 一番は、土地が手に入ったがお金がないから、一番安い家で。かつとにかく地震が嫌だったから、地震で壊れなくて一番安い家ということで探したんですね。それで、僕はプレファブしか無いと思った。ある性能を持っていて安い。今、プレファブは安くないけれども、当時は安かった。僕のいた研究室の助手の、本多昭一さんは内田研出身だから、もう即座に「M1 しかないぞ」と言った。あれはダントツに地震に強くて、安いという。写真か何かで、もう知ってはいたんですけど、選んだんです。その時に、性能と機能と、もう 1 つ表現のことがね、表現が全然無いということが腹が立たない。これを見て色々言う気にならないよね (笑)。もう見るからに実用ですから。

N : 「デザインが無い空間の安心感」ということを書かれていますけど、そのデザインが無いというのは、今おっしゃったような・・・。

F : そうそう。いわゆる「デザインが無い」というのは、デザインを意識的に無くしている訳でもないの。本当に、ただ無いという (笑)。とにかくローコストのために必要なものをとっていき。とっていったらこうなったという。腹が立たないという点で凄くよかったし、それから、中途半端なデザインは嫌、絶対に。これは何も無いですよ。それが精神衛生に凄く良かったし、家内も凄く気に入っていたね。家内が一番これを好んでいましたよ。

N : M1 が出た頃、ある種センセーショナルな所があったような気がしますけど、M1 のところが・・・。

F : M1 っていつ出たの？

N : 1970 年頃ですね。

福田 (以下、K) : 昭和 45 年ですね。1971 年が正式な年だと思いますが。

F : その頃まだ学生だったけど、記憶が無いですね。だから、住宅なんてさ、自分が取得しようと思わないと、特にプレファブなんて、気づかない。でも見たことあるから、知ってた。ああ、あれかという感じでね。

N : この中でお子さんが 3 人育ったと書いてらっしゃいますが、住んでみた感じというのはどのようなものだったのでしょうか。実際に住んだ経験が無いもので。

F : 体育館みたいなものだよね (笑)。部屋は分割されているけど、そんなに分割されていないし、もうあっち行ったりこっち行ったり。中の用途も相当変わった。特にプランニング的には、相当まずかったんですよ。これはハイムが悪いわけではなくてね、南に向かって横使いのハイムの箱を縦使いした私が悪かった。ハイムというのは、階段を降りていくと壁があって、すぐキッチンがあるんですよ。何か書くものある？ (と言って、プランのスケッチをはじめ) ここの箱に台所が入るわけですよ。ここの箱は出る訳ですよ、台所が大きいから。そうするとね、ここに階段がつくわけですよ。踊り場があって。そうする

と、降りてくるとここがほとんど空いてないわけ。ここが鉄骨 2 つの部分なんだよ。そして手摺がついてるんですよ。これはもう、滅茶苦茶なプランニングですよ。2階から降りてくると台所にぶつかる訳だからさ。おかしかったのは何の問題も無いのね (笑)。みんなここから降りてくるという。1本手摺外してね。そこで僕が一個学んだのは、プランニングというのは関係ないんじゃないか、ということね。プランニングというのは、どれだけ住宅に関係あるんだろう、と。わが家の動線は流し台に入っているんだよね、極端なことを言えば。だから今でも思うのは、プランニングというのは本当に要るのか、ということ。これでよければすべていい (笑)。誰も困る人はいないという。子供なんかが一わー一走りまわってね。新潟に避難所があるでしょう、今。あんな感じだよ (笑)。地震に大丈夫なのと、暑さ寒さは大丈夫だった。窓とかしっかりしているし。性能と面積ですよ。この 2 つがあって、あとは何もない。

K: 家を汚しても構わないと思ったから、お子さんが家中落書きして。

F: それは凄かったですよ。天井から何から書いて。だって仕上げだってさ、合板の中にペラペラしたの貼ってあるだけだからさ。言うとな業者が来て、貼り替えてくれる訳ですよ。床だけは……。ハイムって床はどうなったの？

N: 合板の上に絨毯ですね。

F: そう、それが嫌でね。後で絨毯をはいで、合板の上に無垢のナラ材の木を貼ったんですよ。

N: 非常に即物的なゆえに、その中で研究していくと、まわりが装飾的なものだとその影響を受けるように、歴史の仕事をしていく上で、こういう無機質なものがよかったというのはあるんですか。

F: そういうことは無いと思うけど。それとね、これを買おうと思う段階で、「決断」があるんですよ。これは決断を迫るのよ。要するに「諦めろ」と言っているんです (笑)、普通のことは。あのね、うんと重要なことだけど、住宅を作る上で一番大事なことは、住む人がその家に対して主体的になれるかどうか、ということですよ。これはもう決定的なこと。赤瀬川さん (赤瀬川 原平氏) がテレビの番組で答えているのを見てはじめて知ったんだけど、赤瀬川さんの家を私が設計したでしょう。赤瀬川さんも一緒に工事をしたわけ。家作りの本質を突によく突いているなと思ったのは、部分的ではあれ一緒に工事に参加してどういう気持ちになったかということ、要求を出して色々なことを管理する気持ちが無くなった、と。設計者がいて、建設会社がいて、彼らに対して管理者の目で見なくなった、と。だから、もっと言うと内面的理解というか、自分も主体的に関わっていくという眼で見れるようになった。だからストレスが全然無かった。結局、管理の眼で見ると、上手くいっていないところが目につく。普通のお婆さんたちなんか、みんなそうでしょう？管理の眼にならずに一緒にやれた、というのが住宅を作ってもらった時の良かったことだ、と。安藤忠雄さんからすぐ連絡があって、あそこの発言が一番良い発言だったとね。実は、M1 は管理の眼にならないわけですよ。「決断」をして、つまり、ある「主体性」が出る。自分は

なぜこれを選ぶか。自分はお金がないが性能は良いものが欲しい。地震は嫌だ。色々なものを捨てて、でもなおかつこの 2 つの点はしっかりしているから、ということで選んでいる。他の人はどうかわからないけど、僕の場合はそうだった。そうすると、すごく積極的なんですよ、M1 に対して。だから、文句を言おうという気にならない。その辺で住宅展示場でちゃらちゃら選んで、ああ、なんだこんなものか、という訳ではない。相当変なものを自宅として買っている訳ですから（笑）。ハイムに住む人は、相当積極的だったんじゃないか。積極的に成らざるを得なかったんじゃないか。何か諦める訳ですから、あれも欲しい、これも欲しいという状態ではないですよ。自分は何を求めているか、ということを追られる訳ですからね。これが安かっただけで売れたかどうか、という点は面白い所だけどね。僕の記憶では、坪 20 万円位だったと思う。確かではないけどね。普通はね、最低でも坪 30 数万だった気がするの。半値ではなかった気がするけどね。

K : M1 の発売当初の坪単価が 13 万 4 千円で、藤森先生が M1 を購入されたのがその 6 年後位だったと思うのですが、その頃の坪単価がだいたい 20 万円位だったと思います。

F ; だったですよ。世間がどれ位だったか、僕もちょっと覚えていないんですけど、当時もプレファブは一杯ありましたからね。

N : そういう意味で歴史的な観点でいくとどうでしょうか？建築史家としての。

F : これだけ純度の高いプレファブというのは、世界でこれだけです。プレファブというのはロシアで物凄く発達しているんですけど、ロシアの場合も現地にパネルを持って行って組み立てるんですよ。実験的に純粋なプレファブというのは一杯ありますよ。ただ、それらはだいたい実験に終わったんですよ。プレファブの目的というのは、大量生産、大量消費なんですよ。要するにプレファブが念頭に置いている理想というのは車なんですよ。それで、車が念頭に置いているのは住宅なんですよ。この逆転現象は滅茶苦茶面白いよ。なんでトヨタが住宅部門を捨てないか、というのはそれ。本能みたいなもの。住宅というのは個別のものでしょうか。それを産業化しようとする時にいつも理想なのは車なんですよ。それで車というのは工業製品なんだけど、居住性とか個性とかを考えるでしょう、そうすると、住宅にゆく。変なものでね。一方、トヨタはいつまでも住宅。今度、ミサワを買うでしょう？それで三沢千代治さんが怒っているんだよ、お前らに住宅がわかるわけねー、ってね（笑）。

N : でも本能というのは面白いですね。

F ; 僕がそのことに気づいたのは、日産の鮎川義介さんが戦後すぐ住宅をやりがったんですよ。それで前川さんのプレモスに手を出して、前川さんが怒って、途中で喧嘩するんですよ。お前みたいな奴に住宅は渡せない、と。車が住宅のモデルになるというのは、モダニズムはそうでしたから。コルビジェもそうだしね。走る住宅を作りたかった。それは何かあるんですよ。工業化時代と住宅ということを考えると、なぜか車が出てくるんですよ。それで、M1 が一番車に近かったですよ。だって 1 棟 1 棟トラックに乗ってくるんだよ。あれもビックリしたけどね。わかりやすいというか。

N：初めて見た時はビックリしましたけどね。

F：普通は中に品物が入っているんですよ。保冷車とかさ（笑）。なのに、中を見ると住宅。覆いをひゅっと外すとき。あれは不思議な光景だったなあ。やっぱり、そういう意味では、世界の住宅プレファブで最も高い純度で成功した例だし、これ以降出ていないしね。セキスイ自体がやめちゃった訳だから。ハイム M シリーズだけが唯一、世界で成功した。みんな似たこと考えていた。メタボリズムなんかそうだし、カナダなんかでも考えていたし。黒川さんの銀座の中銀カプセルタワーなんか一例ですよ。

N：そういった意味では、メタボリック思想というものが、実際は理想的なもので終わってしまった、と。

F：そうそう。メタボリックにならなかった。プレファブの思想もメタボリズムは実現しなかった。プレファブは、ハイムの成功の後、実は方向転換して、普通の住宅、つまりプレファブ以前の住宅の真似をする訳ですよ。M1 も結局そっちへ行ってしまった。これは何かがあったんですよ。日本では普通、鉄骨というのはコンクリートよりも高いものなわけ。だから日本では鉄骨造住宅が遅れるんですが、鉄骨が使えて、なおかつ安いということで、M1 は普通の住宅イメージを無しでいけた訳ですよ。だけど結局、普通の住宅になっちゃったでしょう？僕が買ってしばらくしたら、タイルを貼り始めちゃった。結局、普通の住宅の伝統的なイメージに擦り寄っちゃうんですよ。だから、これも本当にあの時期だけ成立したものです。とにかく普通の街の中に何万個も建ったんでしょう？これは箱数でいったほうがいいと思うよ。

N：2万棟とすると、単純に20万箱ですよ。MRを含めると、20万箱を超えるみたいですよ。

F：今、こんな出すと、通産省から、すぐに廃棄物処理用の計画を出せって言われるよね。将来どうするつもりか、考えてディテールを作っとけ、って言われますよ、これほど同じ箱を全国に撒いたら（笑）。

F：メーカーとしては、M3以降は再築システムというのを出していますよね。個人的には、M1の、次のリユースの仕方というのを建築的な発想だけではなくて、大野さんがおっしゃる意味での「無目的な箱」としての「無目的性」をもう少し気にしたいと考えています。そうしないと、建築的な発想だけで空間設定が決定されてしまうというのは、非常にぎくしゃくした感じがして・・・。

F：でも、M1は相当汎用性が高いですよ。フレームだけがあって、あとは何とでもなるというのはネ。頼むとフレームだけのポリッシュをやってくれると言っていたよ。骨組みを全部工場に持って行って、悪い所だけ直して、もう1度使うことはできると言われた。そういうことをやる人はいますか、と聞いたら、みんな買い換えると言って笑っていたけど（笑）。

N：でも、Docomomo に認定されて、ある意味建築的な価値が一般の人にもわかり易く認定されたということで、メーカーさんが現在リサーチしている中では、M1のディープなフ

ァンが結構いらして・・・。

F：富田 玲子さんはそうだね。富田さんが言っていたんだけどね、結婚して家を出て行った人が、みんな離婚して戻ってくるって笑ってたよ（笑）。よほど家が好きに違いないって（笑）。

N：そういった意味では、施主の方は、どちらかと言うと機械好きというか理科系の方が多いと聞いていますけどね。

F：だって普通の人は選ばないもん。

N：M1 で育った子供たちがどういう仕事に就き、どういう家庭を持っているか、ということのデータをとったら面白いですね。

F：でも昔よりは M1 を見かけなくなったね。昔は電車に乗ってでも見えたんですよ。「おお、ハイムハイム!!!」ってね。最近は見えていない。

N：工業化という意味では、M1 ができた以前と以後で大きく変わったと思われませんか。

F：変わらなかったと思う。M1 のような方向には行かなかったんですよ。実際の今の工業化というのは、もっと部材製造の方向に行っているわけで、M1 のようにフレームを作るといふ方向には行かなかったですからね。ディテールというか、部材生産の方向に行ったんですよ。そして、そっちの方向で成功したんですよ。今、ハイムのプレファブって鉄骨でこういうことやっているの？

N：やっていますよ。モジュールのサイズは違いますけれども、やはり工場で生産していますよ。

F：でも、それはハイムだけでしょう。他は無いですよ。

N：ユニットの数が 80 種類位あるようですよ。

F：そうなるとユニットとしてはちょっと変なんだ。ほとんど個別に近くなっちゃうんだ。

N：何か、先程おっしゃったような、住宅と自動車の工業化のプロセスにおける「本能」のようなものはどんどん薄れてしまっている気配はあるのですが、M1 の発売から 30 年経って、1 サイクル終わり、ここから始まる、もう 1 サイクルを考える上では、M1 は非常にいい材料ではないかと思うんですけどね。ですから、「意志」を継いでいけるような住宅のあり方と言いますか、伝統的な木造の住宅ですと、その家の良さを受け継いで、保存・修復するという面はあると思うのですが、工業化住宅の中でそういった保存・修復をしようという発想はあまり生まれてこないですよ。

F：誇りに思うということですよ。これを無理してでもちゃんと使おうと思えるかどうかだね。

N：M1 は姿・形が多少変化したとしても、そういう意志が多少ありそうな気がするのですが。

F：家内はこれは素晴らしかったって言っていたもん。これは自分にとって一番大事な家だった、と。

N：どんな点でしょうか？

F: いや、単にこの家での子育ての時期が一番長かったから (笑)。ただね、汚してもいいというのはあったんだ。子供が飛んだり跳ねたりしてもいいしね。それはね、入った途端にわかりますよ。合板の板がペコンペコンしてね、何か変な軽さというか。実用的。ほんとはフラー辺りに見せてあげたかったけどね。

N: 海外ではこういうのは歴史的にあったのでしょうか。

F: 無かったですよ。恐らくありえないですよ。ありえるとしたら、難民の家ですよ。最近の難民や被災者の人たちの家を見ても、結構似ているんだ。杭を打って、上にポコポコ置いてね。基礎は 1 列だけしかまわっていないからね。下は見えるしね。だいたい、窓にシャッターを入れたなんてさ、今までこんなのあった？シャッターには最後まで馴染めなかったけどね。

N: 原型がわからなくなっている M1 を見分けるのは、シャッターの部分ですよ。

F: それ以前にさ、住宅にシャッターってあった？それまでの窓は引き戸だった訳だからさ、相当大胆な発想だと思うよ。工場とか車庫とか、そういうものでしょう、シャッターがあるのは。世界の工業化の住宅でも、シャッター使ったのってハイムだけでしょう？他にある？

K: パッと思い浮かばないですね。

F: 凄いことですよ、上がらなくなったことは無かったからね。性能は良かった。どこをとっても、これを超えるものは出ないでしょうね。鉄板も結構厚いんですよ。工期ゼロだしね。

N: 家を作るプロセスの膨大なプロセスがあるという実感に対しては、本当に一瞬に出来てしまいますからね。

N: M1 の考え方自体が持っている、転用等も含めた可能性についてはどのように思われますか？

F: むしろ、この評価は難波さんに聞いてみたい。難波さんがやっていることとこれの違い。難波さんも鉄骨でやるからさ。どういう風に思っているのかね。

K: 『日本の住宅・戦後 50 年』の中で、藤森先生が、もし大野勝彦の M1 を超えることがあるとすれば、トヨタのような会社が住宅産業に乗り出す時であろうが、そういうことは恐らく起きないであろう、と書かれていますよね。でも実際に今、そういうことが起きつつありますよね。そういった状況で、中村さんのように、M1 を作品として使っている人がいたり。

F: 僕がそう思ったのはね、住宅産業の持っている技術力というのはたいしたことないからです。例えば、自分の所用の特別の鉄を作ることはないんですよ。トヨタは鉄を作らせるわけですから。トヨタの場合だと、梅原 猛さんのお父さんがやったんですが、エンジンに使う鉄の性能から研究していくわけです。住宅産業と自動車産業が持っている技術のレベルというのは、もう本質から違う。普通、住宅産業というのは既にあるものを集めて色々やっているだけ。可能性があるのはね、住宅用の発電機ですよ。発電機を作れば、何が起

きるかという電線が要らなくなる。自動車は、電線引かずに走っているんだ(笑)。それについては、フラーも石山さんも川合健二も考えてはきたけど、だれも実現していないんだよ。でもトヨタは、基本的に自動車の会社だから、それができる可能性があるんだ。たくさん開発するエンジンの中で、音のしないエンジンの発電機を住宅に入れることができたら、販売量って自動車の比じゃないよ。マンションの部屋の1つ1つにそれがつく、とかね。テレビと同じようにそれがついてご覧なさいよ。トヨタが考えていることはそういうことかも知れないんだ。自動車っていうのはエンジンなんですよ。自動車のエンジンの技術が住宅に持ってこれたなら、僕がM1を超える可能性があると思うのは、そういう技術が住宅に入ってきた時のことですよね。極端に言うと、工務店とM1の間に差はないんですが(笑)、それが崩れるんです。例えば、1m四方くらいの小さい箱が住宅の中に埋められるわけですよ。そこにエネルギーユニットが入っているわけです。あとは水。極端な話、ガスは要らないですよ。ガスを使わない家なんて、既に北欧なんかにある。

N: 住まわれていた際に、1度増築をされていますよね。その時に、M1でやられようとは思わなかったのですか。

F: 入らなかった。50cm位足りなかった。最初に作った時、将来、増築をやろうとは思っていなかったから。横に使っても、縦に使っても駄目だったんだ。残念でしたけどね。今のタンポポハウスを作る時、これを残すかどうか迷って、大野さんに残してくれって言われてね。田舎へ運んで残そうかと思ったんだけど、結構運送費が高いんですよ。それで諦めた。基本的には残して、田舎で書庫にでもしようかと思ったんだけどね。

N: 最後に、藤森先生にとってM1とは何でしょうか？

F: 住んで良かったと思っていますよ。色々考えさせられましたよね。だから、純度の高いものだから色々なことを本当に考えますよ。まあ、僕が建築家じゃなかったら、そうかどうかはわからないけども。でも、普通の人で、M1に住んだ人たちは何か違うんじゃないかな。きっとね。建築界で住んだのは、私と富田さんだけかな？

K: シーラカンスの小嶋さんが、子供の頃住んでらしたと聞いています。あと、建築家の方で、今でも愛して住んでらっしゃる方というのは、結構いらっしゃるようですね。

F: いいことだね。

K: ええ。で、皆さん「オリジナル」のM1のスタイルに割と拘ってらっしゃる方が多くて、こういう改築は嫌だ、とか。

N: M1の保存棟が現在、筑波の方に建っているのですが、オリジナルのパーツがほとんど無かったりするんですよ。そういうのを探したりしているんですよ。

F: セクスイはスペアを持っていなかったの？

N: それがなかなか持っていないんですよ。作ることできるらしいのですが。

F: それはトヨタとの根性の違いだね。トヨタに聞いたら、どんなに戦前に作られたものでも、部品は供給します、と。なければ、鋳型を作ってでも供給する。普通の場合は、廃車をためてあるって言ってたよ。スクラップになったものを引き取って、少しずつ部品を外

してためておく。ハイムはあんまりやっていなかったんだ。

N：今のお話しを受けると、M1にもそういったファンが出てきて・・・。

F：俺ん家こそ一番純度の高いM1だぞ、って（笑）。でも、インテリアは皆さんどうしているのかね。

N：キッチンはなかなかオリジナルなものは無いようですけどね。

F：キッチンは幅があるから、隙間ができると困るしね。深かった気がするな。狭くて深かった気がする。あ、こういう儲け方をするんだな、と思ったのは、M1には最初は基本的なものしかついていないでしょ。それに下駄箱とかをつけると、それがメチャクチャ高いの。上手に商売しているな、と思った（笑）。基本的なもの以外は、みんな高いの。他で売っているものは、みんな寸法が合わないから使えない。

それで、ハイムはどこかにちゃんと残しているの？

M：筑波に保存棟を作りました。

F：インテリアも含めて、初期の姿をきちんと残しているの？

N：残しています。

F：ああ、それはうれしい。

N：今日はどうもありがとうございました。